

6. 15日比谷公園を埋めつくした劣勢者、市民、学生、市民の戦列の圧倒的な優勢を享受し、われわれは必死の闘いに打ちあぐねなければならぬ。敵軍の反戦、反安撫の戦列は、なによりも、このように組織されたのか。

このからわれわれが学び得る教訓は、特定の日時によって規定された一街頭闘争の意義の解明にとどまらず、七〇年闘争の端緒にいたる段階のわれわれ自身の状況を把握し、今後の方針を確立するに大きく寄与するはずである。

6. 15のあの戦列は、驚いもなく、平穏な闘争とする六月行動委員会なる市民組織によって計画され準備され、組織された。四月十日以来、反戦、反権力闘争の新たな地平を切り拓いてきた新左翼政治同盟各派は、4.28の時以来一定の政治協定を結び得たにもかかわらず、6.15その戦術の鋭さこそ断固たる攻撃において独自に組織するべきでなかった。

敵軍の強硬な立ち上がり、多くの連綿着がもたらした戦術的勝利は、戦術的勝利を余儀なくされた事情は、個々のセクトに即して考へるならば、必ずしも即戦力とは断定できない。しかし、市民組織による大規模な攻撃に備え、既成セクトが6.15の闘争まで自らのオルタナティブの対案として追求していかれたことは、火を見るよりも明らかである。

市民レベルでの準備工作が進行するにつれて、各セクトはその中に埋没した。市民運動の一環に自らを組織しこむことで、幾多の組織の温度はかりつつ、6.15はなされたのである。

それはなぜか。一体何が向題なのか。いうまでもなく、日共、市民、労働者などといった組織的要素もはやわれわれにとつては向題外である。六月の月日以後の新たなたたかひの地平を、自己の主体性において支持し、そこに参加せんと意思した市民にとつて、いかに、既成セクトがどのように受けとられているのか、理解されているのか、こそが向題なのだ。ゲバルト運動を以てなく、ゲバルト支隊を自らの思想の基盤にするものにとつてこそ、いま、セクトによるゲバルト部隊は、自らの前衛的討伐を待たなくてはならない。ゲバルトによつてなげがどのようにな

しつと、その補充物として破壊することを目指すまで進めなければならぬ。だがしかし、6.15において現実になされたのは、銀座を埋めつくした人々の波は、敵軍にどのような攻撃を受け、衝撃を受けたか。

心情的、形式論理的批判をのりこみ、既成セクトの政治的役割を外部から照らしだすこと。そして、ゲバルト、ノンセクトの圧倒的な戦列に明確な方針を与えること、その指導原理を断固として創出することである。

この課題は極めて困難である。絶望的なまでに困難である。だがこの課題をこなすことなしに、七〇年闘争を貫徹することは断じてできない。

自らのセクトのヘルメットを小さくせ、街頭闘争にかりだそうとして、個別日大闘争に大衆のエネルギーを同じくするのは、自己完結的な改良主義であり、實質的効果も及ぼしていない。このままでは、オルグのサブスターシユの正統化は結局、街頭闘争に上乗せに過ぎなくはないのだ。

日大共闘の革命的伝統を継承せよ!

6.15総括と当面の任務

可能なかどの素朴な疑問に答えることができず、果敢に一歩を踏み出す必要に迫られている。このセクトに即して批判は、既成セクトのシンパイズムを自覚しはじめていなければならない。六月行動の具体的な6.15行動の提起に、かくも多くの市民がその決意をもって応じたのだ。

マイホームから街へ、これが市民の行動の全てだ。街から隊列は、このにむかわればならぬ。われわれは街から出陣するはずだ。既成セクトは沈黙を守り、街の中のデモンストレーションに参加した。街を衝けないものへ、街を衝けるものへ、われわれは、このにむかわらなければならない。教育の階級は、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。

日大共闘の革命的伝統は、歴史的な大衆性と先鋭的な革命闘争をこのに統一したところにある。この6.15から、30まで、一歩を踏み出す。このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。

だが、街頭闘争において、われわれが革命的に勝利する可能性は、むろんあり得ない。われわれの勝利は、常に政治的勝利、したがって一時的、部分的勝利であるにすぎない。革命的敗北を喫することもある。われわれは、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。

われわれの任務は、再掲掲の破壊工作である。しかし、敵日大共闘は、われわれにたかう闘争を禁止しよつて精神的かつ物理的に分断しようとする。これに對して、われわれは早急に激進でシークレットな連絡網を構築しなければならない。

彼らは既成セクトとは別の方向で、具体的な七〇年闘争を開始した。既成セクトとの共通項を確保

いま、われわれにつきつけられた向題は、極めて明確である。それは次に、既成セクトへの

再掲掲の全面的展開という異議を唱へて、たまたか大衆に

その重要は一環であることとされ、本質は得よう。少なくとも日大の学生にとつて、日大の解放が切実な要求である。われわれは、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。われわれは、このにむかわらなければならない。

たまたかの新刊フリーダムゲリラ

購読料はたまたか配布場所はたまたか

このところでもバック

